

CNCP 通信

VOL.137／2025.9.5

■今月の土木■



札幌みんなのサイクル「ポロクル」

▼社会課題への取り組み
・「適疎な地域づくり」の研究
動向1：田中努

▼土木のしごと（ぬりえ）
・「岩淵水門」

▼フレンズコーナー
・北海道の未来のために、
これからも地域とともに
：山本純江

▼事務局通信



日々の現場作業（メンテナンス）



啓発活動への参画（ポロクルクルー）

■北海道の未来のために、これからも地域とともに

（株）ドーコンの取り組み

当社は、北海道の未来のために、地域社会とともに歩む姿勢を大切にしています。その取り組みの一つとして、2011年に札幌都心部でスタートした自転車シェアリングサービス「ポロクル」の事業運営を支援しています。本稿では、総合建設コンサルタントである当社が、なぜポロクルの事業運営に携わっているのか、その背景を「ポロクル」の歴史とともにご紹介します。（山本純江）

▼フレンズコーナーに続く



▼社会課題への取り組み

「適疎な地域づくり」の研究動向 1

CNCP プロジェクト：適疎な地域づくり研究会
シビルNPO 連携プラットフォーム 常務理事/事務局長
メトロ設計株式会社 取締役

田中 努



■「適疎な地域づくり研究会」の活動

8月号の冒頭で触れましたが、「適疎な地域づくり研究会」では、ステージⅠでCSVの勉強をして、ステージⅡで、東京一極集中と地方の過疎の問題に関する勉強と議論をし、日本人の人口減少は避けられないので、「関係人口」を増やすには・・・、人が減っても住みやすい地域とは・・・の議論を重ねました。その中で、「適疎」という言葉があることを知り、「過疎の中にも適疎な地域があり、過密の中にも適疎な地域がある」という認識がメンバーに生まれました。そして、ステージⅢで、「提言」をバージョンアップし、私たち独自の視点で、「適疎」に類する好事例だと思われる地域づくりの事例を探しました。

私たちは、土木屋で、しかもほぼゼネコンのベテランの集まりなので、視座・視点は偏っています。多くの地域づくりに関わる社会学・人文学・農政学・・・というような研究者とは、大きく異なる素人ですが、新たな視座・視点を地域づくりに組み込む切っ掛けになれば・・・と考えています。

勉強しないと素人の妄想になりかねないので、少し「適疎な地域づくり」に関する研究動向を調べてみました。誤解や不足も避けられないと思いますが、ご容赦願います。

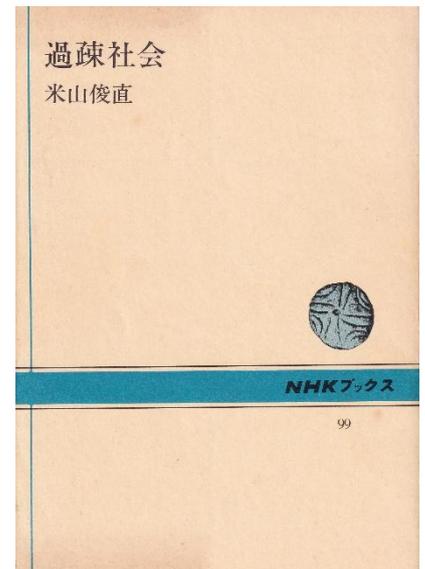
■米山俊直氏の「適疎」

私たちが勉強した範囲では、米山氏が初めて、「適疎」という言葉を使ったのでは？・・・と思います。

米山氏は、1930年奈良生まれで、京都大学大学院を修了して、アメリカ・イリノイ大学に留学し、甲南大学助教授・アメリカのアーラム大学教授・京都大学助教授になられた、農林経済学や文化人類学の専門家です。

米山氏は、右の「過疎社会」という著書で、「過疎問題は、単なる政治や経済、あるいは人口論上の問題ではなく、ふかく個々の人間の生きかた、その実存と関わりあった問題だと思う」と言い、過疎現象を文化人類学の立場から検討し、文化変化の理論への接近の手がかりになれば・・・と述べています。

耐震技術者の私には、ちと難し過ぎるので中身の解説は省略し、「適疎」の話をします。



「適疎」という言葉が出てくるのは、残念ながら、「七 おわりに」の、しかも最後のパラグラフ「よりよい対策のために**適疎社会**をめざして」の締めくくりの言葉として出てきます(笑)。「過疎と一対になっているのは、たいてい過密というコトバである。しかし、ほんとうは過疎の対概念は**適疎**のはずだ。適度に疎らな人口分布は、人間の生活のうえでもっとも快適なものではないだろうか。過疎社会は、いつの日か**適疎社会**に転化しうるとするのは、楽観にすぎるであろうか」と。

そして、このパラグラフでは、過疎問題の対策、つまり、過疎の対概念の適疎に向かう方法として、以下の4つを上げています。きっと、この4つは、私たちが「適疎な地域づくり」を考える上でのヒントになると思います。半世紀前の著書であることに配慮しながら。

- ・対策1：ムラの過去を追わないこと。

ムラつまり行政村内の生活単位である伝統的な集落は、すでにその古いまとまりの機能を殆ど失っている。あるムラに生まれても、早ければ保育所に入る段階から、ムラを超えた場に参加する。今や、それ

それのムラの人々が、自分自身の別の生活圏と関心圏をもち、ムラとの交渉はその一部分にすぎない。ムラを単位にものを考えるのは止めた方がいい。

・対策2：個人の選択を尊重すること。

村人たちが流出するのは、それぞれの個人の意思にもとづいた人生の選択があるからで、それを拘束することは正しくない。職業選択と居住の自由は、国境さえ越えて世界的に承認されるべき基本的人権である。

・対策3：生活は都市との平等を目指す。

物質文化（電気・ガス・テレビ等の家電）という点では、村も都市の平均と比べてそう劣っていない。しかしゴミ処理・汚水処理・医療・娯楽施設など点ではまだ差が大きく、これが改善されれば、村の生活は都市の生活をはるかに上回る環境を生み出せる。

集落の再編成も1つのアイデアである。交通条件が整えば、都市に住み、村は仕事場として「通勤」することも可能になる。

・対策4：あたらしい血を入れる。

過疎社会に新しい秩序を作るためには、これまでの住民だけにこだわらず、その地域に積極的に生きがいを見い出した人々を受け入れ、思う存分活躍してもらおう舞台を用意すべきである。外来の人だけでなくUターンやIターンも含め、積極的な援助をすれば、その人たちの創意を活用して、地域社会の発展を期待できるだろう。

※米山俊直著：過疎社会/NHK ブックス 99/1969年10月20日/日本放送出版協会発行

■山崎亮氏の「適疎」

ネットで「適疎」を検索すると、CNCP 通信の他に（笑）、山崎氏の著書とYouTubeと、次回に予定している摂南大学「適疎戦略研究会」の活動などが出てきます。

山崎氏は、1973年愛知県生まれのコミュニティデザイナーで、京都造形芸術大学の教授です。「人と人とのつながりを基本に、地域の課題を地域に住む人たちが解決し、一人ひとりが豊かに生きるためのコミュニティデザインを実践していて、まちづくりのワークショップや市民参加型のパークマネジメントなど、50以上のプロジェクトに取り組んでいる」そうです。

山崎氏は、大阪府立大学農学部で緑地計画工学を学び、メルボルン工科大学環境デザイン学部でランドスケープアーキテクチャを学び、大阪府立大学大学院農学生命科学研究科で地域生態工学を修了し、東京大学大学院工学研究科の都市工学で博士（工学）を取得されました。「つながりをデザインする」を志向する工学者で、私たちに通じる感覚をお持ちでは？・・・と思います。



山崎氏が初めて「適疎」という言葉をつかったのは、右上の著書「コミュニティデザインの時代」です。この「第1章 なぜいま『コミュニティ』なのか」の「3 『昔はよかった』のか」の最後のパラグラフとして「『**適疎**』を目指して」と出てきます。

このパラグラフでは、次のような論旨が展開されています。

東京で暮らして、不動産屋やレストランに給料のほとんどを貢いでいることに疑問を感じた若者が、同等かそれ以上の可処分所得が手に入る田舎での暮らしを目指すのも無理はない。その若者が、例えば、田舎に移ってカフェを始め、材料を地域の農家から調達する。その農家は、都市に輸送する費用が掛からないので従来より適正価格に近い高額で買って貰え、カフェの存在が地方経済に貢献することになる。また、田舎にカフェが出来ると、地域の若い女性たちだけでなく、年寄りたちも店にいることが多く、さ

らに観光客も立ち寄る。若いオーナーは、こうした人たちに話しかけ、交流を促す。こんな仕事・生活にあこがれる若い人たちが増えているのは、これからの社会にとって希望だ・・・と。

このように、地元の産業の様々なところに、都市部からの移住者が入り込み、地元の人たちだけでは出来なかったような新しい取り組みに挑戦する。外から来た人たちも、地元の人たちの協力がなければ無力なので、両者がうまく協働し始めた地域から、人口減少時代の新たなビジョンが示されつつある。しかし、過密であるから成り立っている大都市のビジネスモデルは参考にならず、緩やかに人口が減り続ける地方では、若者と高齢者の関係をうまくつなぎながら、あるいは地域の資源をうまく生かしながら、幸せに暮らしていく方法に関心が集まっている・・・と言います。

地域の適正人口規模を見据え、地域でどう暮らしていくのかを考え、それをひとつずつ実践することが重要で、適切に疎らである「**適疎**」を前提としてまちの将来を考えることが求められる時代になったと言えよう・・・と。

この適正人口規模は、人口統計を基に、地元の人口は長い間どれくらいの規模だったのか？ 無理せず暮らしていた時代の人口規模はいくらだったか？・・・を把握し、将来の人口規模をイメージしながら、今後の生き方を模索するのがいいだろう。そこから新しい地域のイメージが立ち現れるだろうし、新しい日本のイメージが浮かび上がることになるはずだ・・・としています。

山崎氏の「適疎」の考えや思いは、下記の2つのYouTubeを見ると、容易に分かります。

YouTubeの「適疎について」の中で、山崎氏は、「過疎と過密の間に、適切に疎らである状態がある」として、勝手に作った造語だと話しています。



YouTubeの「適疎について」

都会は、仕事があり、便利でオシャレとかで人が集まってくるが、仕事をしたり住みたい人が多いので住居費が高く、生産地から離れていながら求める人が多いので、新鮮で美味しいものは高い。一方、過疎の地域は、生産地が近く新鮮なものが安価で手に入ったり、比較的広い家に住むことも可能な場所である。

自分がどう生きていきたいのかを考えて、自分にとって「適切に疎ら（適疎）」な場所を見つけるということも大事なんじゃないでしょうか？・・・ということ「コミュニティデザインの時代」で書いたそうです。

その後、コロナ禍があって、過密な都会に集まっていながら「三密」を避けることを求められたり、リモートワークで仕事をして会社に行かない生活をして、コロナ前は学校や会社に出かけて夜しか家族全員が一緒に居なかったのに、1日中全員が家に居て「狭い！」と感じるなどで、「適切な疎ら（適疎）」ということを再考するようになったのではないかと・・・。

人が少ない地域に住んでいた人達が、都会に近づいてきて、この辺りが賑わっていて適疎だなと思うかもしれない。一方、大都会に住んでいた人が、同じところまで来たら、ちょっと寂しいと感じるかもしれない。適疎か否かは、個人の感覚なので、客観的に数値で表せるものではないでしょう。自分にとって「適切に疎ら（適疎）」であるという地域を見つけたら、きっと住みやすくなると思います。・・・と話しています。是非、見てみてください。

※山崎亮著：コミュニティデザインの時代—自分たちで「まち」をつくる—/中公新書 2184/2012年9月25日/中央公論新社発行

※YouTube；**適疎**について：<https://www.youtube.com/watch?v=MgM1kLPe8zk>

※YouTube；過密でも過疎でもない「**適疎**」（福井新聞社のインタビュー）：

<https://www.youtube.com/watch?v=ZWpPhGIOzOI>

※無印良品「くらしの良品研究所」のコラム「適疎（てきそ）」とは？：

<https://www.muji.net/lab/living/210630.html>

▼土木と市民社会をつなぐフォーラムから

シリーズ 子どもが知りたい土木の世界を発見！

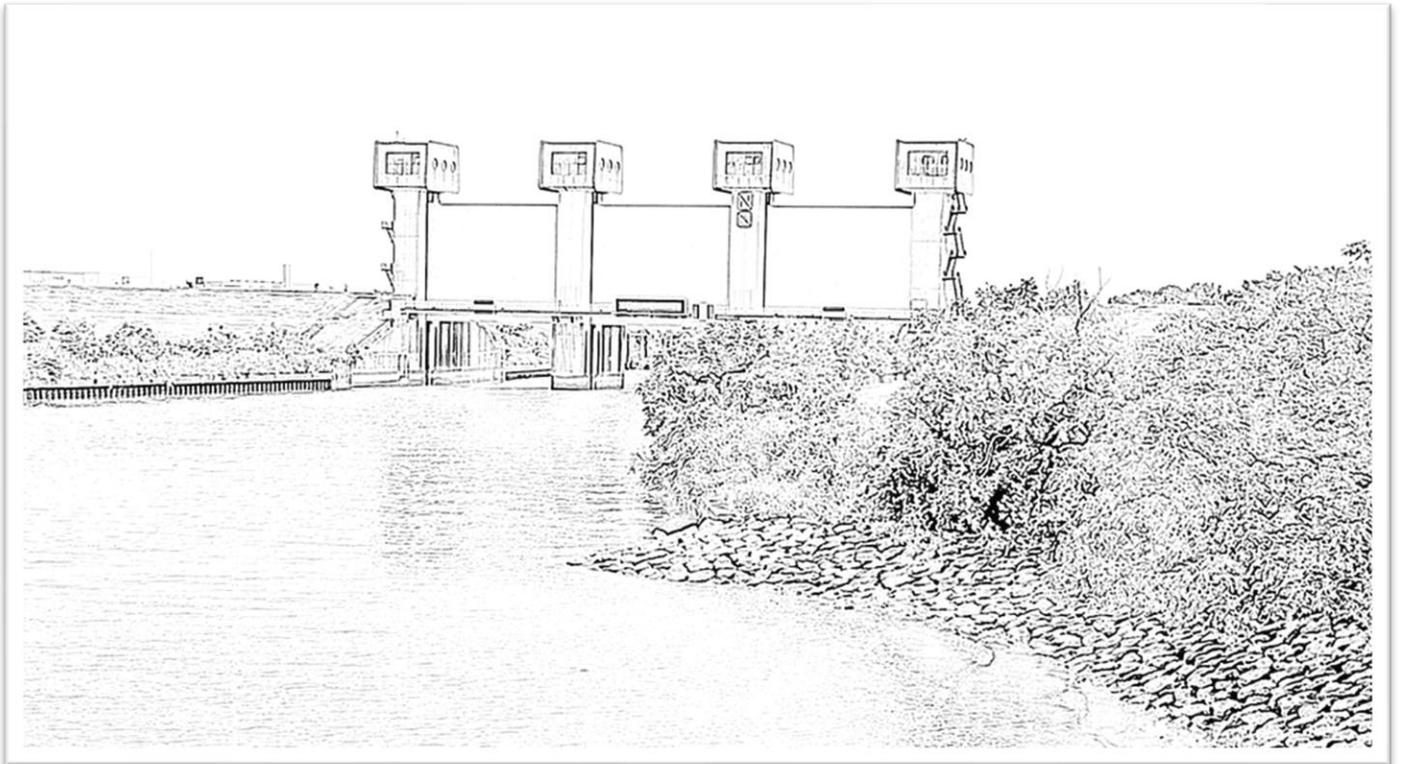
土木の
しごと

このコーナーでは、CNCP 会員や関係者の皆様から提供いただいた、土木構造物のぬりえや素敵な写真、イラストなどの作品を紹介します。

荒川放水路 祝 100 周年！

土木ぬりえ
いわぶちすいもん
「岩淵水門」

1973（昭和 48）年には水害から都心を守るため、大正期に建設された赤水門を廃止することが決まり、1982（昭和 57）年、約 300m 下流に新しい岩淵水門（通称：青水門）が完成しました。2つの水門は、徒歩 6 分ほどの距離にあるので一緒に見学することができます。



所在地：東京都北区志茂 5 丁目 4 1 付近



荒川放水路について、CNCP 通信 VOL.129/2025.1.5 に NPO 法人あらかわ学会 伊納 浩さんが書いた『荒川放水路通水 100 周年記念を踏まえた「赤水門（旧岩淵水門）の重要文化財指定を考えるシンポジウム」について ～地域住民の想いが詰まった文化財～』を掲載しています。読めばさらにぬりえが楽しくなりますよ！

ぬりえの作成は、(株)パイロットコーポレーションの「写真でぬりえをつくろう。」を活用しています。
「写真でぬりえをつくろう。」 <https://pilot-nurie.jp/>

▼フレンズコーナー

北海道の未来のために、これからも地域とともに

(株)ドーコン 交通事業本部交通部 都心交通企画室 副主幹
 特定非営利活動法人ポロクル 事務局長
山本 純江



■シェアサイクル「ポロクル」

みなさんは、シェアサイクル「ポロクル」をご存じでしょうか？2011年から札幌都心部で開始された自転車のシェアリングサービスです。当社は、そのポロクルの事業運営を全面的にサポートしています。

北海道札幌市の積雪寒冷地という特性上、営業期間は4月上旬～11月中旬までの約7か月間だけとなっており、2025年度は60カ所以上の専用自転車駐輪場（以下、ポート）、600台超の自転車で営業をしています。なお、ポロクルの「ポロ」は札幌、「クル」はサイクル（自転車）を意味しています。

今回は、「なぜ（株）ドーコンがポロクルの事業運営をサポートしているのか？」についてお伝えします。



写真 シェアサイクル「ポロクル」

■「ポロクル」の草創期 ～2008年-2013年 ゼロからの挑戦～

2008年頃の札幌都心部は自転車利用が急速に増え、歩道を勢いよく走行する自転車が歩行者の安全を脅かし、放置自転車が歩道に溢れ点字ブロックを塞ぐ等、まちの景観も悪化。また、地球温暖化、人口減少といった社会的課題も顕在化していました。

この状況に問題意識を持った（株）ドーコンの有志たちが「チーム自転車創業」を立ち上げ、総合コンサルタントとしての新たな挑戦として、東京大学の羽藤英二教授（当時は准教授）の指導を仰ぎ「北海道モビリティ研究会」を発足させました。新しいモビリティである「シェアサイクル」が都市や社会の課題解決にどう役立つのか議論と、株式会社NTTドコモ（以下ドコモ）との共同実証実験を重ね、2011年に（株）ドーコンの子会社として「（株）ドーコンモビリティデザイン」を立ち上げ、シェアサイクルサービスを開始しました。

自転車をシェアするという概念がまだ浸透していない中の挑戦であり、全国的にもシェアサイクルの先駆的存在と言える取り組みでした。



写真 社会実験の様子（2009年）

シェアサイクル事業を展開しながら、地域課題解決を目指した活動も実施しました。

現場運営は、環境問題に取り組む NPO 法人 ezorock に依頼し、所属する学生を中心とした「ポロクルクルー」と呼ばれる若者たちが担いました。彼らは自ら考え、現場を運営しながら、ハンドサインでドライバーとコミュニケーションをとって車道の左側走行を実践しました。

また、札幌大通まちづくり（株）と連携して、歩道での自転車押し歩き啓発活動やまちの賑わい創出の取り組みを進めるなど、「まちの未来」について考え行動してきました。



写真 ポロクルクルーの活動

■「ポロクル」の転換期 ～2014年-2018年

シェアサイクル事業をスタートしたものの、事業採算性は想像以上に厳しく、(株)ドーコンモビリティデザインを解散するという判断に至りました。それでも「事業、活動を継続したい」という強い思いから、2014年11月に北海道大学の萩原亨教授(当時)を理事長に迎え、NPO 法人として事業活動を続ける道を選びました。2016年には、貢献活動の公益性が高く評価され、札幌市の認定を受け「認定 NPO 法人ポロクル」へとステップアップしました。

しかし、設備やシステムの老朽化や不安定な収支構造が大きな課題となり、事業の継続が難しい状況となりました。この状況を打開するため、2019年にシェアサイクル事業の全国展開を進めていた(株)NTTドコモのオペレーションシステムへ転換することにより収支は大きく改善、持続可能な経営に向けて希望を持つことができました。

同年には、シェアサイクル事業を通して市民や観光客の行動の範囲拡大や促進を図るとともに、交通マナーの普及・啓発も併せて実施する等、地域活性化に貢献したと評価され、国土交通省から「自転車活用推進功績者表彰」を受賞しました。

再構築への決断～



図 認定 NPO 法人ポロクルの活動理念

■「ポロクル」の成長期 ～2019年- 未来への歩み～

利便性が格段に向上したことや、地域との連携も増えたことで、2024年度のシェアサイクル事業は自転車約600台、ポート約60カ所提供服务を提供し、会員数は約9万件となりました。

自転車の総利用回数は51万回を超え、1台あたりの1日平均利用回数(回転率)は4.2回と全国でもトップクラスを誇ります。日常の通勤や通学での利用のほか、ショッピングや食事、観光などでも幅広く使われています。今年度も、前年に比べて約10%の利用者増加が見られ、引き続き増加傾向で推移しています。



同年には、ポロクルがシェアサイクル関連事業を通じて、まちづくり・ひとづくりに貢献し、地域の交通システムとして成長してきたプロセスが評価され、「シェアサイクルで街をささえ人がそだつ～札幌市での自転車文化の鼓動～」と題して、国際交通安全学会（IATSS）2024年度学会賞（業績部門）を受賞しました。

■「ポロクル」が目指すもの

ポロクルは行政が運営に関与していない、日本国内では数少ない完全民間による事業です。そのポロクルがここまで持続、発展し、地域に浸透できたのは、創業当初から、シェアサイクル事業の枠を超えて、「まちづくり・ひとづくり・魅力づくりに貢献する」というミッションを自らに課し、様々な公益活動に取り組んできたことが大きいと考えています。

2023年度には、「札幌市自転車活用推進計画」においてシェアサイクルの利用促進が重要施策として位置づけられ、今後はより一層、行政や関係団体と連携して、社会情勢や市民意識の変化に応じたサービスを展開していくことが求められています。

ポロクルはこれまで、未来に向けた地域の交通システムとして成長するだけでなく、地域交通に関する一連のまちづくり活動に取り組んできました。たとえば、国内初となるシェアサイクルと公共交通の複合経路検索サービス「mixway」の共同開発や、行政や企業との交通安全啓発活動の実施、ヘルメット着用促進に向けた取り組み、行政との防災協定の締結、環境に配慮したポロクルユーザー参加型のゴミ拾い活動、「第9期北海道総合開発計画※」を周知するためポロクル特別仕様車を導入するなど、『ポロクル』が様々な地域社会の課題解決に役立つよう取り組んでいます。

※北海道総合開発計画：北海道の資源や特性を活かして国の課題解決に寄与するとともに、地域の活力ある発展を図ることを目的に閣議決定される計画

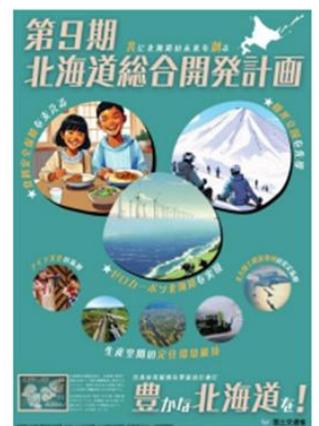


図 ポロクル特別仕様車 たった1台の「9期計画号」

■おわりに

こうした活動は、まさしく、総合建設コンサルタントゆえの視座に基づくものであり、その想いが形となって、利用者をはじめ、民間企業・団体、学識者、行政など、多くの方々から大いなるご支援をいただくことができ、現在につながっていると考えています。

建設コンサルタントの役割は時代とともに常に変化し、多様化していきます。当社は北海道に根差した総合建設コンサルタントとして、北の大地で培ってきた技術と経験、そして様々なつながりを活かし、北海道の未来のために、地域に寄り添い、ともに歩み続けながら、豊かな人間環境の創造に貢献できるようこれからも取り組んでいく所存です。

(株)ドーコン ホームページ <https://www.docon.jp/>

認定NPO法人ポロクル WEB ページ https://porocle.jp/npo_porocle/

シェアサイクル「ポロクル」 WEB ページ <https://porocle.jp/>

ポロクルが作成している自転車のルール啓発動画 https://porocle.jp/rule-bicycle/rule_movie/

CNCP は、
あなたが参加し、
楽しく議論し、
活動する場です。

お問い合わせは下記まで

特定非営利活動法人
シビルNPO
連携プラット
フォーム

●登録事務所
〒110-0004
東京都台東区下谷
1丁目11番15号
ソレイユ入谷

事務局長 田中 努：
cncp.office@gmail.com
ホームページ URL：
<https://npo-cncp.org/>



▼事務局通信

■8月の実績

●第136回経営会議

開催日・場所：8月13日（水）Zoom会議
議題：R6年度事業報告／R7年度事業計画／サロンの計画

●令和6年度監事監査

開催日・場所：8月20日（水）メトロ設計（株）
議題：R6年度事業報告・決算報告

●令和7年度第1回理事会

開催日・場所：8月26日（火）Zoom会議
議題：R6年度事業報告・決算報告／R7年度事業計画

■9月の予定

●第137回経営会議

開催日・場所：9月9日（火）Zoom会議
議題：総会の準備／サロンの計画／適疎な地域づくりの進め方

■現在の会員と仲間の数

●会員：賛助会員 30／法人正会員 8／個人正会員 22／合計 60

●仲間：サポーター95／フレンズ 141／土木と市民社会をつなぐフォーラム 15／インフラパートナー18／合計 269

●CNCPの活動には下記の賛助会員の皆さまのご支援をいただいています（50音順・株式会社等省略）。

アイ・エス・エス／アイセイ／安藤・間／エイト日本技術開発／エヌシーイー／奥村組／オリエンタルコンサルタンツ／ガイアート／熊谷組／建設技術研究所／五洋建設／佐藤工業／シンワ技研コンサルタント／スバル興業／セリオス／第一復建／竹中土木／鉄建建設／東亜建設工業／東急建設／ドーコン／飛島建設／土木学会／西松建設／日本工営／パシフィックコンサルタンツ／フジタ／復建エンジニアリング／復建調査設計／前田建設工業（以上30社）



土木と市民社会を
つなぐフォーラム



インフラパートナー
JSCCE 土木学会